

表2 田村第と興慶宮の対応

田村第		興慶宮	
名称	田村第→田村宮	隆慶坊	→興慶宮
居住者	大炊王→立太子	皇太子玄宗	→即位
施設	東西の楼、櫓	花萼相輝楼・勤政務本楼	
位置	宮城の東南部	宮城の東南部	

苑池からなる園林 平城宮の園林には松林苑、南苑、西池宮、宮西南池亭、楊梅宮南池などがある。園林は中国では苑圃（えんゆう）と称した施設で、広大な面積に多数の園池や宮殿楼閣、亭、広場、農・果樹園、鳥獸苑などがある。宮城に必須の施設であり、その規模や数は帝国の徳を表す。ここは饗宴の場であるとともに農産物や鳥獸の生産、狩猟、戦闘訓練の場だった。

平城宮の園林が苑池からなること、農産物（蔬菜・果樹）の栽培を主とすることなどは長安城の影響であろう。長安城の園林には宮城に付属した西内苑、東内苑、禁苑と太液池など苑と池から成る。また、農産物の栽培は、園林を管理した司農寺上林署の職掌に明記されており、日本の宮内省園池司の職掌のもとになっている。

さらに、平城宮園林の名称や故事を仔細にみると、その背後には唐以前の長い歴史が反映している可能性がある。名称では南苑や楊梅宮「南池」、西池がそうであるし、「一茎二花蓮」といった楊梅宮南池における祥瑞は、いずれも南北朝期園林の故事を思わせる。

このように平城宮の園林には中国園林の長い歴史が反映しているが、これらは唐との交流の過程でもたらされたものであろう。

【コメント】

木原 克司

金子裕之氏は、日本の都城には平城京形と藤原京形の2つの形態があり、それらを北闕形、周礼形と呼称された。金子氏が北闕形と指摘される長安城は、当時の天文思想にのっとり都城の中央北寄りに宮城を配置するものであり、日本の平城京もまさにこの形態を採用している。中国でも北闕形は唐代以降の都城の基本形態として踏襲されるが、日本も同様であり以後の難波・長岡・平安京へと継承される。一方周礼形とする藤原京の構造は、『周礼』の「冬官考工記」に記された理想の都と類似し、こうした京の出現の根拠として、『周礼』形モデルを導入したためだと一応の説明は可能である。しかし、中国の都城の歴史をながめてみても、こうした『周礼』形モデルの都城は見あたらない。中国にも実在しなかった都城形態が何故に7世紀後半の日本に採用されたのか疑問である。天智朝から天武朝にかけての7世紀後半から末の時代は、朝鮮半島における百濟・高句麗の滅亡などを契機として東アジア世界の国際関係が緊迫した時期である。遣唐使も天智8年（669）の河内鯨以降大宝元年（701）の粟田真人まで中断され、唐からの情報は入手不可能であった。しかし、この間新羅との往来は頻繁に行われてお

り、遣新羅使は5回、来朝新羅使は実に16回を数え、新羅を経由して朝鮮半島の情報が入って来ていた時期である。新羅の都城慶州の構造は、いくつかの復原案が提示されているものの未だ確定していない。しかし、その構造は東潮氏が指摘するように規模や造営尺の上で藤原京と類似点が見られ、藤原京のルーツを慶州に求めることもあながち不可能ではないように思える。

中国と日本の都城の発展過程をみると類似点と相違点が認められる。王朝行政の頂点に立つ皇帝にとって、中国全土を支配するための中央諸官庁や一群の官僚組織が必要不可欠である。それは天皇を中心とした律令国家の形成を目指した日本でも同様であった。中国の秦・漢代の城は、宮室の他に中央官庁、貴族・官吏の居宅や彼らの日常生活の需要に応ずるための「市」を城内に設置していた。北魏の洛陽城もこうした段階の都城と考えられる。こうした城の構造を一変させたのは、『長安志』巻7の唐皇城の条に記述されるように隋の文帝であり、その結果宮城と郭城（京）が成立する。唐の長安城はその完成された形態を示すと言え、平城京はその形態を模倣したものである。しかし、中国都城は「城を築きて以て君を衛り、郭を造りて以て民を居らしむ」に見えるように、城壁で囲まれた郭城（京城）と垣牆で囲まれた坊という2重の郭壁により守られた空間を形成したものであるが、日本都城は城壁のない京と垣牆のない坊から構成されており、造営の背後に見られる基本的思想を異にしていると言える。

長安城には太極宮、大明宮、興慶宮の3宮城がある。金子氏はこれら3宮城が宮廷儀式において使い分けされていたと指摘する。すなわち、太極宮が即位・朝賀・大葬といった最重要の儀式に使用され、その他の儀式を大明宮で実施したとする。そして、これら3宮殿を平城京の第1次朝堂、第2次朝堂と藤原仲麻呂邸の田村第にあてている。しかし、第2代皇帝太宗により634年龍首原に永安宮（後の大明宮）が造営された後、高宗の663年からは大明宮が宮城内の太極宮の地位に取って替わったとする見解がある。大明宮内には、含元殿・宣政殿・紫宸殿が南北に建ち並ぶ。初期の遣唐使が派遣された7世紀前半には太極宮しかなく、平城京が造営される8世紀始めには、実質的な権威が太極宮から大明宮に移動したとすると、平城宮の中心にある第1次朝堂院が当時の大明宮をモデルとして造営された可能性が高いのではなからうか。それならば第1次朝堂の大極殿が含元殿と似た構造をとるのも理解できよう。

平城宮の内外には4箇所の園林があり、それらが苑と池から構成されていることも長安城の園林と共通するところがある。平城宮の南苑・楊梅宮南池・西宮池の名称を唐以前の南朝の園林故事を踏まえる固有名詞であるとし、こうした園林呼称が日本だけでなく朝鮮三国にも求められるとする金子氏の指摘は興味深い。また、日本の律令が唐のそれに倣ったものであり、養老令職員令にも園池司という役所があることから当然であるかもしれないが、園林の管理や利用法に関しても唐代の影響が大きかったようである。ただ、『長安の春』などを見るかぎり、中国の園林が皇帝、貴族や文人といった当時の知識人だけでなく一般の民衆にも一部開放された遊びの場であったのに対して、日本の平城京などでは天皇・貴族・官僚など限られた人びとのみに利用された施設であったように思える。これは中国都城と日本都城の構成員を含めた本質的な違いから生じたものであろう。

(鳴門教育大学学校教育学部)